

---

# 散文

下本 公下

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
散文

【Nコード】  
N0779Z

【作者名】  
下本 公下

【あらすじ】  
前も後ろもない散文です。

ガクリとうなだれる雲が空間を押し潰している。今日はきつと、いつもより重力が増しているに違いない。僕はほとんど這うように色褪せたコンクリートの上を歩いた。息苦しいのは顔まで垂れ下がってきた雲のせいだろう。視界を遮る白い靄。水分を含んだそれが息をする度に体内に流れ込むから窒息寸前だった。コンクリートの上で溺死。なんて滑稽だろう。まさに自分にはお誂え向きの死に様だと思った。眼を閉じると、目蓋の中で眼球も溺れた。左手を持ち上げて口を塞ぐ。その下で唇を噛み締めた。血が出るほどの強さを出せない自分が哀れだった。落下するような感覚に身体が強ばった瞬間にはもう、すでに両膝が地面についていた。痛みが骨を響かせながら全身に伝わる。その揺れのせいで、睫毛にぶら下がっていたはずの涙が、ポツリ。一粒だけコンクリートの色を鮮やかに蘇らせた。僕はもう、なんだか堪らないような気持ちになって両手で顔を覆った。自分の流す涙に溺れて死ぬのなら、それは幾分かマシなように思えたから。肩が規則的に跳ね上がり、喉がみっともない音を立てた。悲しかった。とてつもなく悲しかった。なぜこんなにも悲しいのか、理由を知るのは怖かった。もつと悲しい気持ちになるような気がしたから。白い靄が濃くなる気配を、手の平の中から感じた。このまま、この靄に包まれて、すべてを煙に巻ければいいのに。コツリ。そう願った時に、膝に感じた軽い衝撃。僕はそっと手を離れた。視線の先にあったのは、誰かの爪先。少し汚れたスニーカーの爪先だった。

「いつもは持ってないんだけど。」

聞こえた声に顔を上げる。あつたはずの白い靄は、いつの間にもだるう。きれいさっぱりなくなっていた。目の前には見知らぬ誰かが、ハンカチを差し出していた。

「いつもは持ってないんだけど、今日はポケットにねじ込んで。」

ヒラリとハンカチが振られた。自分の顔の有様にも思い至らずに、僕はただ、その誰かを見ていた。

「そしたらここで貴方を見掛けて。だから私は、あなたにこのハンカチを渡すべきなんだと思う。そしてあなたは、これを受け取るべきなんだと思う。」

そう言って、ふわりと見上げる僕の顔にハンカチを被せた。

「それから。泣けるということは、尊いことだと思います。」

僕は再び持ち上げた両手で、そのままそのハンカチに顔を押し付けた。ジワリと濡れた布の感触。確かに、涙が吸い取られていた。手を下げて、前を見た。誰かの後ろ姿が、遠ざかって行った。

.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0779z/>

---

散文

2011年12月2日22時45分発行